

## 実践報告

### 集合分譲住宅内での“子育てひろば”を通した母親のコミュニティ醸成

巖 千晶 Chiaki Iwao\* ・ 片岡 優華 Yuka Kataoka\*\* ・ 二村 文子 Fumiko Nimura\*\*  
宝田 慶子 Keiko Houta\*\* ・ 菱沼 由梨 Yuri Hishinuma ・ 安達 久美子 Kumiko Adachi\*

\*東京都立大学 助産学専攻科 Graduate Program of Midwifery, Tokyo Metropolitan University

\*\*創価大学 看護学部 Faculty of Nursing, Soka University

**目的：**集合分譲住宅内の“子育てひろば”を通して、母親がどのようにコミュニティを醸成しているのかを明らかにした。

**方法：**“子育てひろば”に参加した母親 6 名に半構造化面接を行い、質的記述的に分析した。本研究は所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

**結果：**“子育てひろば”を通して母親達は、《顔見知りになる》《まだ心を開ききれない関係性》《コミュニティが作られ始める》《コミュニティが広がる兆し》《今後につながる関係性を構築し始める》《今後につながる関係性になる》《支え合える関係性が構築される》というプロセスでコミュニティを醸成し、《育児相談のニーズ》《子どもの成長を実感》などがそのプロセスを促進していた。

**結論：**“子育てひろば”を利用した母親は、交流の頻度と質を変化させながら段階を経て、様々な促進要因によりエンパワメントされ、互いの関係性を発展させ、コミュニティを醸成していた。

**キーワード：**集合分譲住宅、子育てひろば、コミュニティ醸成、プロセス、エンパワメント

## I. 緒言

わが国では、都市部へ人口が集中しているにも関わらず、少子高齢化や核家族化が進み、地域社会のつながりが希薄化になっている。その中で、母親は周囲からの支援を受けられず孤立化し、不安やストレスを抱え込むようになっていった<sup>1)</sup>。その結果、子育てに困難を抱える母親が増加し、子育て支

援のより一層の充実が求められている。国は子育て支援のためにさまざまな対策を講じており、その 1 つとして「地域子育て支援拠点事業」を行い、2014 年度には児童福祉法に基づき、「地域子育て支援拠点事業実施要綱」<sup>2)</sup>を定めた。2021(令和 3)年度地域子育て支援拠点事業の拠点は、現在 7,856 か所<sup>3)</sup>となり、漸増している。

子育て支援事業の質の向上をはかるために、全国組織として「NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会」が設立された。ここでは、1) 妊娠、出産、乳幼児期の子育て家庭が気兼ねなく集まり交流できる場、2) 乳幼児期の子どもたちが安心して、のびのびと遊べる場、3) 子育ての情報を得たり、交換できる場、4) 親子が育ち合う仲間と出会える場、5) 子育て経験や体験を通じて、親同士が学び合える場、6) 親自身が主体となれる場、人との関係性を育める場、7) 子育ての悩みに寄り添って聞いてくれるスタッフがいる場、8) 地域のボランティアをはじめ、様々な人が子育てに関わり、社会全体で子育てを応援する場<sup>4)</sup>を子育てひろばと定めている。

子育てひろばについての先行研究は、調査対象が様々である。学生を対象とした調査では、地域子育て支援センターでの看護学生の学び<sup>5)6)</sup>や実習方法の検討<sup>7)8)</sup>、子育てひろばでの学生のかかわりや存在が親子に与える影響や学生自身の経験<sup>9)</sup>などがある。利用者を対象とした調査では、子育て支援施設を利用することでの親子の変化の有無と内容<sup>10)</sup>や子育てひろばに通う母親の「付き合い・交流」の実態<sup>11)</sup>が報告され、支援しているスタッフを対象とした調査では、支援スタッフから見た母子への子育て支援の効果<sup>12)</sup>が明らかにされている。子育てひろばの利用頻度に関わる要因を分析している研究においては、0歳児の母親は、育児そのものや子ども本人にイライラや腹立ち、気疲れを感じている人が子育てひろばをよく利用している<sup>13)</sup>と報告されている。

国外ではホームレスのための子育て支援プログラム<sup>14)</sup>、子育てグループを対象に母子の早期愛着とレジリエンスの構築プログラム(BEAR プログラム)<sup>15)</sup>、居住型子育てユニット入院中の人の経験<sup>16)</sup>、中国人移民家族のための子育てプログラム<sup>17)</sup>というような子育て支援のプログラム等を作成し、評価している研究が多い。以上より、国内外において、集合分譲住宅内を対象に子育てひろばを開催し、その実態や効果を明らかにした研究は、見当たらなかった。

そこで本研究では、集合分譲住宅内で開催する“子育てひろば”を通して、そこに定住することが見込まれる母親がどのようにコミュニティを醸成していくのかを明らかにすることを目的とした。本研究により、集合分譲住宅内での“子育てひろば”という育児支援が母親同士をつなぐきっかけになると期待できる。

また、コミュニティとは、目的、関心、価値、感情などを共有する社会空間に参加意識を持ち、主体的に相互作用を行っている場、または集団、実際に活動する仲間の集まりであり、活発な相互作用により豊かな関係性が育まれること<sup>18)</sup>である。なお本研究におけるコミュニティとは、“子育てひろば”を通して、子育てに関して関心、価値、感情などを共有し、活発な相互作用により新たな友人・知人という豊かな関係性が育まれることと定義する。

## II. 研究方法

## 1.“子育てひろば”の概要

本研究では、研究者が開催した、集合分譲住宅の共有スペースを利用し、月 1 回程度開催する、0～3 歳児の親子向けの手遊びやイベントなど 40 分程度で行ったものを“子育てひろば”と定義する。“子育てひろば”は、同じ集合分譲住宅に居住する親子の交流と仲間づくりを通し、住宅内のコミュニティの醸成を図ることを目的に、都内の A 区と B 市の新築集合分譲住まで、1～2 か月に 1 回程度ずつ、A 区では 9 回、B 市では 5 回の合計 14 回、集合分譲住宅の各共有スペースで開催した。参加者は毎回 6 組程度で、0 歳児が最も多く、おおよそ 0～3 歳の子どもが各年代 1 人以上参加していた。A 区では延べ 54 組、B 市では延べ 27 組、計 81 組が参加した。また、親子 3 人(両親と子ども 1 人、母親と子ども 2 人)で参加することもあり、概ね 2 回以上参加していた。また毎回の参加者の中で、第一子が 7 割以上を占めていた。

“子育てひろば”の企画・準備は教員(助産師)6 名、助産学専攻科学生 10 名で行い、当日の運営は教員 1～5 名、学生 2 名で行った。所要時間は毎回 45 分程度、手遊びから始まり、自己紹介、ミニ講座や遊び、交流会の順番で行った。また交流会の時や帰宅の際など、必要時、教員(助産師)が相談を受ける機会を設けた。毎回、子どもの発達段階や季節、参加されている親子の希望等を考慮し、ミニ講座や遊びの内容を検討し、実施した(表 1)。また“子育てひろば”の開催にあたっては、B 市の集合分譲住宅の共有スペースを運営し、地域づくり・交流を行う NPO 法人とも連携をとり、運営した。NPO 法人の代表者も、“子育てひろば”開催時には、地域の子育て支援の情報をアナウンス等実施した。

## 2.研究デザイン

質的記述的研究デザイン

## 3.研究対象者

“子育てひろば”に参加した母親を対象とした。

表 1 A 区と B 市の “子育てひろば” 開催概要

開催日	開催場所	子どもの参加人数	参加親子組数	ミニ講座や遊びの内容
1 5月12日	A区	5人	4組	参加者同士の交流を深めるレクリエーション
2 6月9日	A区	10人	9組	参加者同士の交流を深めるレクリエーション
3 7月5日	A区	7人	7組	七夕の工作
4 9月8日	A区	2人	2組	親子で出来るストレッチ
5 10月16日	B市	7人	6組	参加者同士の交流を深めるレクリエーション
6 10月21日	A区	7人	6組	離乳食相談会
7 11月2日	B市	4人	3組	参加者同士の交流を深めるレクリエーション
8 11月8日	A区	5人	5組	感染予防対策講座
9 12月21日	B市	7人	5組	感染予防対策講座
10 1月16日	A区	8人	7組	事故予防対策講座
11 2月20日	B市	7人	6組	事故予防対策講座
12 2月24日	A区	5人	6組	年齢別室内親子遊び
13 3月6日	A区	11人	9組	イースターの工作
14 3月20日	B市	7人	7組	紙芝居

#### 4.調査期間

2023 年 1～2 月

#### 5.調査方法

“子育てひろば”参加時に研究対象者を募集し、研究対象者に 1 回ずつインタビューガイドを用い、半構造化面接を行った。インタビュー内容は、1)“子育てひろば”に参加した感想を教えてください、2)“子育てひろば”に参加して、家族(こども・パートナーなど)はどのような様子でしたか、3)“子育てひろば”に参加して、新しい友人・知人が増えるきっかけになりましたか、4)“子育てひろば”に参加して、子育てに関する話・相談が気軽にできる新たな友人・知人はできましたか、5)“子育てひろば”に参加したメリット・デメリットがあれば教えてください、6)“子育てひろば”に参加して、子育てに関する心配・不安の軽減がありましたか、7)今後も“子育てひろば”に参加したいですか、とした。また、研究対象者の経験を自由に語ってもらえるように留意した。インタビュー内容は、研究対象者の同意を得て、録音した。録音データに関しては USB に保存し、パスワードを設定し第三者が情報を見ることが出来ないようにし、研究代表者の研究室の鍵付きのロッカーに保管した。

#### 6.リクルート方法

今回の研究対象者は、本研究の定義する“子育てひろば”に参加した母親と条件が限られているため、機縁法を用いて次の手順で行った。1)集合分譲住宅へ出向き、子育てひろばの参加者に研究協力依頼書を配布し、口頭で

研究の概要を説明した。2)研究への参加に同意の場合は、後日メールで連絡をもらい、研究協力の同意書等必要書類を郵送した。3)必要書類が返送されたことを確認し、研究対象者とした。

#### 7.分析方法

録音したインタビューデータから逐語録を作成し、集合分譲住宅における“子育てひろば”を通したコミュニティ醸成、コミュニティ醸成の促進因子、についてそれぞれ該当する記述を抜き出し帰納的に分類した。それぞれに関わる語りの内容を明確にしつつコードを形成した後、コード間の類似性と相違性に基づき、サブカテゴリー、カテゴリーへと集約をした。分析は 2～3 名ずつグループになり、分析結果に相違が生じた場合は、全研究者で逐語録を読み合わせ、解釈が一致するまで分析を繰り返した。分析終了後、もう一度全研究者が逐語録の精読と、サブカテゴリー、カテゴリーの照らし合わせを行い、分析結果の妥当性の確保に努めた。

#### 8.倫理的配慮

研究対象者へは、研究で得られたデータにより個人・居住地が特定されることはないこと、研究への参加は自由意思に基づくものであること、研究の協力の有無は今後の“子育てひろば”への参加に影響を及ぼさないこと、データの保管方法・期限、プライバシーの保護等について、文章及び口頭で説明し、自署された同意書の提出をもって、研究協力への承諾を得た。また、同意撤回に関しては、分析が

開始するまでの期間にいつでも撤回できること、撤回方法を文章及び口頭で説明した。

本研究は、2022 年度東京都立大学荒川キャンパス研究倫理委員会の承認(承認番号 22026)を得て実施した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 研究対象者の概要及びインタビュー所要時間

研究対象者は 6 名であり、A 区居住 4 名(a,b,d,f)、B 市居住 2 名(c,e)であった。研究対象者の子どもの年齢は、インタビュー時点で、0 歳児 3 名、1 歳児 2 名、2 歳児 1 名、3 歳児 2 名であり、初産婦が 4 名、経産婦が 2 名であった。インタビュー方法としては、4 名オンライン、2 名対面であった。インタビュー所要時間は平均 21.5 (最短 16、最長 30) 分だった。また、インタビュー時の“子育てひろば”への参加回数は平均 3.8(最小 2、最大 6) 回だった。

#### 2.“子育てひろば”を通した母親のコミュニティ醸成のプロセス(表 2)

インタビューによって得られたデータから、86 のコード、19 のサブカテゴリー、7 のカテゴリーが抽出された(表 2)。以下、カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは< >、研究対象者の語りを「」で記載し、カテゴリーごとに説明をする。また、研究対象者の語りに関しては、意味内容が成り立つように一部文言を補足し( )

内に示し、発言者のアルファベットを記載した。

##### 1) 《顔見知りになる》

新築の集合分譲住宅に引っ越した際は、どのような人が集合分譲住宅内に居住しているかわからなかったが、“子育てひろば”に参加することを通してという<どのような人が集合分譲住宅内に居住しているかを認識する>状況になった。また、「お友達も何回か同じタイミングで来た人がいて(c)」という<何回か会う機会があり、お互いを認識する>状況であった。

##### 2) 《まだ心を開ききれない関係性》

集合分譲住宅での“子育てひろば”を通して関係性を築いていく中でも、「ちょっとまあ、まだ気を遣って(b)」という<まだ心を開ききれない関係性>の状況も続いていた。

##### 3) 《コミュニティが作られ始める》

お互い顔見知りになってからは、「どのくらいの服とか着てるのかとか(d)」、という<“子育てひろば”で、子育てでの知りたい情報を尋ねる>ことをしていた。また、「ママさんとの交流会もメインになってるので(e)」という<交流し、近況報告し合う>状況であった。

##### 4) 《コミュニティが広がる兆し》

コミュニティが少しずつ作られ始めてからは、<集合分譲住宅内に知り合いができる>状況や、<知り合いになった人と“子育てひろば”以外で偶然会い、会話をする>状況になった。また、<“子育てひろば”で、子育ての相談に乗ってもらう>状

況や、「いろんな情報とか(“子育てひろば”に行った時に)やっぱ交換し合えたりするんで(e)」という<“子育てひろば”で、子育てに関する情報交換をする>状況であった。

5)《今後につながる関係性を構築し始める》

コミュニティが少しずつ広がる兆しが見え始めてからは、<集合分譲住宅内に友達ができる>状況になった。また、「回数を重ねることで、ちょっとライン交換したり(b)」という<連絡先を交換する>ことをしたり、「節分パーティーみたいなものしょうっていう話になっていて(f)」という<子育てひろば以外で会う約束をする>状況であった。

6)《今後につながる関係性になる》

支え合える関係性が構築されるのと同じように、「(ママ友との関係が)今後ずっと続くようなたぶん感じにはなっているので(c)」という<今後もつながる関係性になる>状況や、<“子育てひろば”以外で会い、外で一緒に遊ぶ>状況があった。また、<“子育てひろば”以外で、友達の家で会い遊ぶ>状況や、「マンションの“子育てひろば”で友達になった家族3家庭と、区の子育て広場で出会った方でマンションの住人ではない家族の2家庭と(節分パーティーをする)(f)」という<“子育てひろば”を介しての友達の輪が広がる>状況もあった。

7)《支え合える関係性が構築される》

今後につながる関係性を構築し始めてからは、<子育てに必要な用品を交換・譲

表2 “子育てひろば”を通した母親のコミュニティ醸成のプロセス

カテゴリー	サブカテゴリー
顔見知りになる	どのような人が集合分譲住宅内に居住しているかを認識する 何回か会う機会がありお互いを認識する
まだ心を開ききれない関係性	まだ心を開ききれない関係性
コミュニティが作られ始める	“子育てひろば”で、子育てでの知りたい情報を尋ねる 交流し、近況報告し合う 集合分譲住宅内に知り合いができる
コミュニティが広がる兆し	知り合いになった人と“子育てひろば”以外で偶然会い、会話をする
	“子育てひろば”で、子育ての相談に乗ってもらう
	“子育てひろば”で、子育てに関する情報交換をする
今後につながる関係性を構築し始める	集合分譲住宅内に友達ができる
	連絡先を交換する
	子育てひろば以外で会う約束をする
今後につながる関係性になる	今後もつながる関係性になる
	“子育てひろば”以外で会い、外で一緒に遊ぶ
	“子育てひろば”以外で、友達の家で会い遊ぶ
	“子育てひろば”を介しての友達の輪が広がる
支え合える関係性が構築される	子育てに必要な用品を交換・譲る
	気軽に連絡を取り合う
	支え合う関係性になる

る>ことをしたり、すごい気軽に連絡取れる仲の方もいますね(e)」という<気軽に連絡を取り合う>ことをしていた。また、「もうお互い支え合おうねっていう形で話はしてますね(e)」という<支え合う関係性になる>状況もあった。

3. “子育てひろば”内外での母親のコミュニティ醸成の段階(図1)

“子育てひろば”を通した母親のコミュニティ醸成は、2段階に分かれており、“子育てひろば”での関係性の創生から始まり、“子育てひろば”外での関係性の発展へと段階を経てプロセスを形成していった。

“子育てひろば”での関係性の創生では、《顔見知りになる》、《コミュニティが構成され始める》、《コミュニティが広がる兆し》という順番に段階を経ている

中で、《まだ心を開ききれていない》という状況も続いていた。“子育てひろば”外での関係性への発展では、《今後につながる関係性を構築し始める》から《今後につながる関係性になる》《支え合える関係性が構築される》という順番に段階を経ていた。

4. “子育てひろば”を通した母親のコミュニティ醸成の促進因子について

“子育てひろば”を通した母親のコミュニティ醸成の促進因子は、インタビューによって得られたデータから、229のコード、30のサブカテゴリー、11のカテゴリーが抽出された(表3)。以下、カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは< >、コミュニティ醸成のプロセスの段階は【 】で記載する。

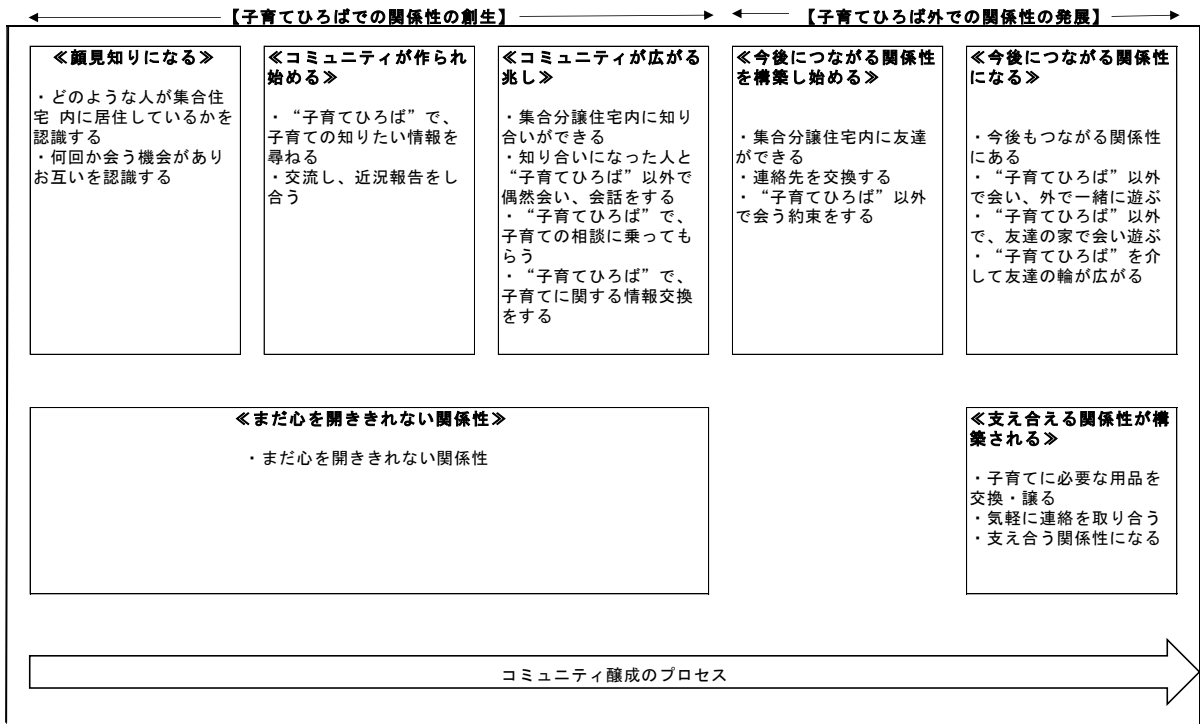


図1 コミュニティ醸成の段階

表3 “子育てひろば”を通したコミュニティ醸成の促進因子

カテゴリー	サブカテゴリー
近くに友達がいない状況	近くに知り合い・ママ友がいない
	集合分譲住宅だけど居住者がわからない
	普段の子ども同士の交流がない
	情報交換ができていない
身近な友人作りのニーズ	相談したいことがある
	集合分譲住宅内に友達が欲しい
	集合分譲住宅内で友達をつくる難しさを感じる
育児相談のニーズ	育児方法がわからない
	育児方法に困っている
	育児への戸惑いがある
	子どものことで悩んでいる
“子育てひろば”への参加ニーズ	集合住宅内で同年代の子と触れ合える
	助産師に相談できて安心できる
	参加しやすい企画
集合分譲住宅内での交流の発生	参加前から家族同士の付き合いがある
	新しい家族との交流のきっかけになる
	新しい知り合いができる良さを感じる
交流の良さを実感	交流の良さを感じる
	次の交流のきっかけになる
共通する子育て状況	似た状況の人が集まる
	普段の交流がしやすい
子どもの成長を実感	子どもの喜怒哀楽が豊かになる実感
	子どもの身体面での変化を実感
	他子との関わりによる子どもの変化
	実体験から学べる
実体験を情報交換する良さの実感	実際に会って得る情報が信頼できる
	情報交換ができる良さを感じる
	先輩ママに相談できる良さを感じる
	同じ経験や悩みを共感する大切さを実感
	得た知識を育児に活かせる
子育てに対する前向きな気持ち	育児の心配や不安が楽になる
	母親の気分転換になる
	ママ友との関係が今後もつながる良さを実感
今後の子育てとキャリアの見通し	子どもとママ友との今後の生活を見据えている
	子育てをしながらのキャリアを考えるきっかけ

新築の集合分譲住宅に居住した母親は、＜近くに知り合い・ママ友がいない＞＜集合分譲住宅だけど居住者がわからない＞＜普段の子ども同士の交流がない＞＜情報交換ができていない＞という《近くに友達がいない状況》や、＜相談したいことがある＞＜集合分譲住宅内に友達が欲しい＞＜集合分譲住宅内で友達をつくる難しさを感じる＞という《身近な友人作りのニーズ》、＜育児方法がわからない＞＜育児方法に困っている＞＜育児への戸惑いがある＞＜子どものことで悩んでい

る＞という《育児相談のニーズ》が確認できた。さらに＜集合住宅内で同年代の子と触れ合える＞＜助産師に相談できて安心できる＞＜参加しやすい企画＞という《“子育てひろば”への参加ニーズ》があり、“子育てひろば”に参加しており、これらが母親達の【子育てひろばでの関係性の創生】の促進因子としても働いていた。

“子育てひろば”に1度参加をしてからは、＜参加前から家族同士の付き合いがある＞＜新しい家族との交流のきっかけ

になる><新しい知り合いができる良さを感じる>という《集合分譲住宅内での交流の発生》が起き、<交流の良さを感じる><次の交流のきっかけになる>という《交流の良さを実感》していた。さらに<似た状況の人が集まる><普段の交流がしやすい>という《共通する子育て状況》にあり、子ども同士の交流を通して<子どもの喜怒哀楽が豊かになる実感>や<子どもの身体面での変化を実感>をし<他子との関わりによる子どもの変化>を感じ、《子どもの成長を実感》を経験していた。さらに、母親同士の交流からは<実体験から学べる><実際に会って得る情報が信頼できる><情報交換ができる良さを感じる><先輩ママに相談できる良さを感じる><同じ経験や悩みを共感する大切さを実感>するいう《実体験を情報交換する良さの実感》を経験していた。これらの交流の経験を重ねると<得た知識を育児に活かせる><育児の心配や不安が楽になる><母親の気分転換になる>という《子育てに対する前向きな気持ち》、<ママ友との関係が今後につながる良さを実感><子どもとママ友との今後の生活を見据えている><子育てをしながらのキャリアを考えるきっかけ>になるという《今後の子育てとキャリアの見通し》をすることが、母親にとっての良い体験になり、【子育てひろば外での関係性の発展】へとコミュニティ醸成を加速させる促進因子として働いていた。

#### IV. 考察

本結果より、新築の集合分譲住宅に居住する0～3歳児のいる子育て世代の住民は、“子育てひろば”に参加することを通して、多くの人とつながり、様々な促進因子に影響を受けながら主体性を高め、コミュニティ醸成のプロセスをたどっていたことが明らかとなった。中谷は「信頼と安心、共同」の子育てや“癒しの人間関係”を作り出すには、まず人同士がつながる必要がある。そしてお互いのありのままをまず受け入れ、その上でお互いに学び合い、支え合い、高め合うことが大切である。(中略) その積み重ねはそのまま、エンパワメント・プロセスをたどるものととらえることができる」<sup>19)</sup>と述べており、本研究の結果からのコミュニティの醸成のプロセスの中では、母親がエンパワメントされる様相も明らかとなった。

##### 1.“子育てひろば”を通してのコミュニティ醸成のプロセス

###### 1) 本研究における対象者の特性

本研究の対象者は、新築分譲集合住宅に居住しているという特徴があり、<近くに友達がいない状況>であった。近年の調査によると、産後における育児の相談相手は実親・配偶者に次いで、友人・知人(初産婦 32.0%、経産婦 26.2%)<sup>20)</sup>であり、この時期のママ友の存在は重要である。さらに、3か月児を有する、集合住宅に居住する母親は、「相談がある」者の割合が有意に高いこと<sup>21)</sup>が明らかにされていることから、集合住宅内にお

いて、相談できる場や仲間がいるということは特に重要である。本研究の参加者においても《身近な友人作りのニーズ》《育児相談のニーズ》があり、《“子育てひろば”への参加ニーズ》につながっていた。

## 2) コミュニティ醸成のプロセス

本研究における“子育てひろば”の開催は、《顔見知りになる》というお互いの存在を認識する、仲間づくりのきっかけとなり、情報交換や相談等の交流の機会となり《コミュニティが作られ始める》こととなった。育児期における親のエンパワメントは、「仲間の存在」「仲間の交流」を前提<sup>22)</sup>として生じるという先行研究の結果と合致していた。さらに、“子育てひろば”の参加を契機として知り合いができ、“子育てひろば”以外の場でも会話をするようになるなどの《コミュニティが広がる兆し》へと進み、コミュニティ醸成のプロセスの【“子育てひろば”での関係性の創生】が進展していた。本研究では、“子育てひろば”での子ども同士の遊ぶ体験は《子どもの成長を実感》をもたらし、醸成の促進因子となっていた。飯島らも、子どもを通した付き合いが母親同士の交流を増やしていた<sup>11)</sup>と述べており、まさにこの体験が交流を増やし、コミュニティ醸成の促進につながっていったと考えられる。加えて、本研究の対象者は、新築の集合分譲住宅に移住した背景を持ち、同じ敷地内に居住するというコミュニティであるため、“子育て

てひろば”以外でも偶然に会う機会があり、仲間づくりのきっかけができれば、コミュニティ醸成が進みやすい環境であったことも影響していると考ええる。

## 3) コミュニティ醸成に関わる促進因子

本研究の対象者は＜“子育てひろば”で子育ての相談に乗ってもらう＞経験をし、《交流の良さを実感》《実体験を情報交換する良さの実感》をしており、ママ友や先輩ママと関わり、相談をする中で共感し合い、学びを得られたことで、その価値を認識し醸成の促進因子となっていた。先行研究によると、これらの「仲間への相談」「仲間による傾聴・共感・承認」「交流の価値の認識」「絆の認識」「仲間からの気づきと対処法を知る」は育児期における親のエンパワメントの構成要素<sup>23)</sup>である。母親たちは、これらの経験によりエンパワメントされたことで、主体的に仲間との交流を創ることに発展し、《今後につながる関係性を構築し始める》《今後につながる関係性になる》《支え合える関係性が構築される》という【子育てひろば外での関係性の発展】へとコミュニティが醸成され、集合住宅内での育児をする仲間としての絆の認識が高まっていったと考える。

さらに、関係性を発展させていく上での促進因子として、＜得られた知識を自分の育児に活かせる実感＞をしており、仲間からの気づきと対処法を知る経験をした結果、自分の育児に活かすという主体性が生じていた。また、＜子育ての心配

や不安が楽になる>などの《子育てに対する前向きな気持ち》という変化が生じていた。そして、交流を通して仲間との今後の関係や自身にも目が向けられるようになり、《今後の子育てとキャリアの見通し》のように、子育てから、自分のキャリアにも目を向けることができていた。先行研究<sup>22)</sup>によると、エンパワメントされた結果、「主体的に育児する力の向上」「自己概念の向上」「QOLの向上」が生じると言われており、本研究の対象者も、仲間同士の交流と相互作用により、エンパワメントされた様相が確認でき、その経験が支え合う大切な仲間として自己認識を深めることを促進し、コミュニティが醸成されていったと考えられた。本研究におけるコミュニティ醸成のプロセスは、地域で子育てをする母親のエンパワメントのプロセスをなぞらえており、中谷<sup>19)</sup>の考えを支持する結果であった。本研究は“子育てひろば”開始後、数か月の時点での分析となったが、今後もコミュニティ醸成が進むことが予測できる。

## 2.“子育てひろば”の開催がコミュニティ醸成にもたらしたもの

今回の“子育てひろば”は、新築の集合分譲住宅の住民に対象を限定し、敷地内の共有スペースで、企業・地域・大学(助産師)の連携により運営したものであった。つまり、企業は集合分譲住宅内の空間を提供し、地域の運営者は地域に根付いた子育て支援情報を伝えたり、大学(助産師)は、専門知識を活かし、母親たちに寄

り添い質問をできる場を提供していた。そのため、“子育てひろば”は、親同士の交流する場、情報交換の場、安心感のある場、子どもが楽しく遊ぶ場など様々な役割を果たすことができた。そして、これらがコミュニティ醸成につながっていた。

今回の取り組みである“子育てひろば”の内容は、NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会の子育てひろばの定義と合致しており、今回実施した集合分譲住宅内での“子育てひろば”も地域子育て拠点の1つになり得たものと考ええる。加えて佐々木らも、子育てサロンに参加している母親が、子育て経験の浅い者、集合住宅に住む者、経済状況にゆとりのある者が、「人とつながる力」が強かった<sup>24)</sup>と述べている。今回は一集合住宅内という条件のもとで開催された“子育てひろば”だからこそ、親同士の共通点も多く、コミュニティ醸成が進んだのではないかと推察できる。

## VII. 研究の限界と課題

本研究の対象者は6名と限られ、データに偏りが生じている可能性があるため、結果を一般化するには、さらなる調査が必要である。今後は長期的にコミュニティ醸成をサポートするための支援内容を検討することが課題である。

## VIII. 結論

2か所の集合分譲住宅で“子育てひろば”を開催し、母親のコミュニティ醸成プロセスを明ら

かにした。“子育てひろば”を利用した母親は、交流の頻度と質を変化させながら段階を経て様々な促進要因によりエンパワメントされ、互いの関係性を発展させ、コミュニティを醸成していた。また、“子育てひろば”は、母親同士がつながるきっかけとなり、孤立感軽減の一助となった。子育て支援が重視される昨今、企業・地域・大学（助産師）の連携による“子育てひろば”は、子育て支援の要になっていくことが期待される。

（本研究は、大成有楽不動産株式会社の受託研究の一部として実施した）

利益相反 本論文内容に関連する利益相反事項はない。

受付 2023 年 10 月 20 日

受理 2024 年 5 月 1 日

#### 文献

- 1) 安達久美子,藤内修二,中谷芳美他:助産学講座 9.我部山キヨ子,地域母子保健・国際母子保健,第 6 版:P191,医学書院,2023.
- 2) 厚生労働省:地域子育て支援拠点事業の実施について(実施要領).2021,  
<https://www.mhlw.go.jp/content/000638481.pdf>,2023 年 6 月 28 日.
- 3) 厚生労働省:令和 3 年度実施状況.2023,  
<https://www.mhlw.go.jp/content/000963075.pdf>,2023 年 6 月 28 日.
- 4) NPO 法人子育てひろば:ひろば全協とは,2016,

<https://kosodatehiroba.com/02about.html>, 2023 年 6 月 28 日.

- 5) 松野智香子,那波潤美:地域子育て支援センターでの体験における看護学生の学び.修文大学紀要,11:77-84,2020.
- 6) 那波潤美,松野智香子:地域子育て支援センターと母性看護学実習での学びの関連性の検討.修文大学紀要,11:1-12, 2020.
- 7) 澤田みどり,山口さつき:子育て支援センター実習を取り入れた母性看護学実習の検討(第 2 報).旭川大学保健福祉学部研究紀要,12,25-29,2020.
- 8) 山口さつき,澤田みどり:子育て支援センター実習を取り入れた母性看護学実習の検討.旭川大学保健福祉学部研究紀要,11:15-21,2019.
- 9) 柳瀬洋美:大学における乳児期・子育て支援グループ活動 I 親支援・家族支援の場としての「子育てひろば」.東京家政学院大学紀要,50:1-12,2010.
- 10) 三好年江,金山時恵:子育て支援施設を利用することによる親子の育ち 質問紙調査における自由記述の内容分析から.新見公立大学紀要,40:203-210,2019
- 11) 飯島明子,安達久美子,坂田清美:子育てひろばに通う母親の「付き合い・交流」の実態 居住年数の違いからの分析.母性衛生,56(4):683-691,2016.
- 12) 津間文子:地域子育て支援拠点事業『子育てひろば』に通う母子の実態と支援の実態 子育て支援にかかわる専

- 門職 4 名のインタビューから.看護・保健科学研究誌,18(1):97-106,2018.
- 13) 小島康生:乳幼児の母親を対象とした子育てひろばの利用頻度に関わる要因.家族心理学研究,34(1):55-69,2020.
- 14) Sandy L Sheller,Karen M Hudson,Joan Rosen Bloch,et al.:Family Care Curriculum: A Parenting Support Program for Families Experiencing Homelessness.Matern Child Health J,22(9):1247-1254,2018.
- 15) Sophie Li-Shan Tan,Lesley Stafford,Christina Bryant,et al.:Subjective experiences of participating in an attachment-based early intervention parenting program.Clinical Child Psychology Psychiatry,26(4):968-980,2021.
- 16) Cathrine Fowler,Marie Dickinson,Leanne Daggar,et al.:Mothers' experiences while admitted to a residential parenting unit:a qualitative study.Contemporary Nurse,55(2-3):95-108,2019.
- 17) Leslie K Wang,Sylvie H M Wong,Stephen H Chen,Yoyo Yau et al.: Establishing a Parenting Program for Transnationally Separated Chinese Immigrant Families: Community-Based Pilot Program.Psychiatric Services,71(8):868-871,2020.
- 18) 安梅勅江:コミュニティ・エンパワメントの技法当事者主体の新しいシステムづくり,初版:4-9,医歯薬出版株式会社,2005.
- 19) 中谷奈津子:地域子育て支援と母親のエンパワメント 内発的発展の可能性,初版:23,大学教育出版,2008.
- 20) ベネッセ教育総合研究所:産前産後の生活とサポートについての調査.2015,<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4704>,2023 年 5 月 27 日.
- 21) 村井智郁子,林知里,横山美江:母親の育児に関する相談事と背景要因 3 ヶ月児健康診査のデータ分析から.日本公衆衛生看護学会誌,3(1):2-10,2014.
- 22) 片岡優華,安達久美子,河内浩美他:日本における「育児期の親のエンパワメント」の概念分析.母性衛生,64(4):636-646,2024.
- 23) 大峰花乃故,関屋信子,石岡洋子他:乳児を持つ母親の孤独感に関連する要因.高知大学看護学会誌,14(1):3-11,2020.
- 24) 佐々木龍,本田光:子育てサロンに参加している母親の「人とつながる力」の因子構造.北海道公衆衛生学雑誌,32(2):69-76,2019.

Fostering a community of mothers through “childcare in open spaces” in condominium complexes

**Objective:** This study aims to clarify how mothers in condominium complexes foster communities through “childcare in open spaces.”

**Design and Method:** Semi-structured interviews were conducted with six mothers who performed “childcare in open spaces.” The interview data were quantitatively and descriptively analyzed. This study was approved by the Ethics Committee of the affiliated institution.

**Results:** Through performing “childcare in open spaces,” the mothers fostered communities based on the following step-by step process: “knowing each other,” “new relationships with hitherto strangers,” “formation of new communities,” “signs of expanding communities,” “beginning to build relationships for the future,” “formation of long-lasting relationships,” and “completion of supportive relationships.” In addition, the step-by step process was promoted by the mothers’ “childcare needs” and “realization of the growth of the children.”

**Conclusion:** Mothers who used “childcare in open spaces” changed the frequency and quality of their interactions. They were empowered by various promoting factors, developed mutual relationships, and fostered communities.

**Keywords;** condominium complexes, childcare in open spaces, fostering a community, process, empowerment